広島大学　大学教育研究センター　大学論集
第21集（1991年度）1992年３月発行：187－208

近代日本における文芸エリートと高等教育

山　内　乾　史

目　次

1．はじめに－文芸エリート研究の必要性と問題点について－
①エリート社会学における文芸家の研究状況
②文学社会学における文芸家の研究状況
2．中世・近世日本における文芸エリートの構成
3．近代日本の文芸エリートの構成
①出身地
②出身階層
③最終学歴
④東京、京都両帝大出身者の出身高校
⑤卒業率
⑥高等教育機関での専攻
4．結果の総括と今後の展望

近代日本における文芸エリートと高等教育

山 内 乾 史*

1．はじめに－文芸エリート研究の必要性と問題点について－

本稿の目的は，近代日本においてその創作を通じて国民の価値形成に大きな影響を及ぼし，さらには現代もなお影響を及ぼし続けていると考えられる，文芸エリートの社会的構成について考察を加えることである。ここでは特に，高等教育がその形成に果たす役割を検討するための基礎作業を行うこととする。

ここで，特に高等教育との関連を問題にすることには，二つの意味がある。第一には，文芸エリートは，高等教育機関を通じて形成されるのかどうか，ということを検討するためである。第二には，高等教育機関において人文科学系の学問を修めた者がどのように社会的に貢献しているのか，その一端を検討するためである。なぜなら，従来，人文科学系の学問を修めた者は，高等教育研究においても，エリート研究においても軽視されてきたきらいがあるからである。後述するように，文芸エリートには人文科学系の学問，特に文学，哲学を修めた者が多く，したがって，文芸エリートを研究することによって，人文科学系の学問の社会的貢献の一端を計り知ることができるのである。

ところで，文芸エリート研究という領域は，エリート社会学と文学社会学の境界にあると思われる。そこで，最初にエリート社会学における文芸家の研究状況と，文学社会学における文芸家の研究状況とを検討してみよう。

①エリート社会学における文芸家の研究状況

教育社会学，あるいは社会学の領域において，各領域のエリート研究が盛んに行われてきたことは周知のとおりである。エリート研究はまず，アメリカにおいて盛んに行われるようになり，ミルズ[1]，ラスウェル[2]，ケラー[3]，パリィ[4] などの研究がある。また，フランスではジラール[5] の研究が代表的であろう。また，近年では下位領域別の研究も進み，ユシームのビジネス・エリートに関する研究[6]，ズッカーマンの科学エリートに関する研究[7]，クリストファーのパワー・エリート研究[8] などがある。

エリート研究のためのアプローチには，制度的アプローチと，キャリア・アプローチとがある。日本の場合には，エリート研究は主としてキャリア・アプローチによって開始された。例えば，青沼吉松の経営者層の研究[9]，萬成博のビジネス・エリートの研究[10] がその代表としてあげられよう。その後，個人のキャリア形成の中でも特に教育に重点をおいて分析を行い，近代化を推進する前衛の養成制度としての高等教育の役割に注目した研究が登場する。このようなアプローチは，制度的アプローチとキャリア・アプローチとを力動的にミックスしたものであり，制度的＝キャリア・アプローチと呼び得るであろう。麻生誠の一連の研究[11] はその嚆矢と思われる。麻生は『人事興信

*広島大学　大学教育研究センター助手

録』をデータ・ソースとして，明治期以降のエリートの属性について吟味し，エリート形成に高等教育が果たした役割について論じた。麻生以降，『人事興信録』をデータ・ソースとし，制度的＝キャリア・アプローチを用いて，エリート全般の社会的構成について検討した研究としては，中道実[12]，岩見和彦・曽和信一・富田英典・中村勝行[13]があげられよう。

しかし，エリート研究の主流は各下位領域のエリート研究が占めるようになっていく。例えば，政治エリートに関しては高根正昭[14]，軍事エリートに関しては河野仁[15]，廣田照幸[16]，秦郁彦[17]，女性エリートに関しては黒岡千佳子[18]，ビジネス・エリートに関しては竹内洋[19]，波平勇夫[20]，高瀬武典・山本慶裕[21]，山本慶裕[22]，黒岡千佳子[23]，社会運動家に関しては葉柳和則[24]，高級官僚については秦郁彦の研究[25]などがある。さらに，近代日本におけるローカル・エリートの研究も近年注目されはじめ，廣田照幸・佐藤広志[26]は鳥取県の名士を検討している。

一方，制度的アプローチによる研究としては，北川隆吉・貝沼洵[27]，橋本鉱市[28]，深谷昌志[29]などがあり，内容的にも選抜の問題，育成の問題，配分の問題と広く各領域にわたって研究が進展している。

しかし，これらのエリートに関する諸先行研究を概観してわかることは文化諸領域のエリートに関する研究が皆無に近いということである。その中にあって，文化諸領域のエリートの属性について言及している貴重な研究としては，麻生誠，萬成博，中道実の研究があげられる。そこでまず，これらの研究成果を概観してみよう。

第一に，麻生の研究を検討しよう。麻生の研究では，一貫して文芸家は「芸術家」というカテゴリーの中に含まれている。麻生の1967年の著書『エリートと教育』は，前述のように『人事興信録』をエリート・インデックスにして，族籍，学歴を検討した論文を中心としたものであるが，これから次のことがわかる。①全エリート中に占める芸術家（文芸家はここに含まれる）の比率はどの時期をとってみても極めて低い。具体的には明治36年，大正４年，昭和３年と芸術家は皆無で，昭和14年に２人（0.3%），昭和30年に17人（2.8%），昭和39年に４人（0.7%）となっている。②サンプル数が少なく，明確な結論は下せないものの，学歴については他のエリートよりも低い。昭和14年，昭和30年，昭和39年の各時点の芸術家の内，東京大学出身者数は，それぞれ０人，２人，１人となっている。逆に高等教育を経ていない芸術家の数は，それぞれ１人，８人，１人である。

また，1978年の調査結果をまとめた論文「現代日本におけるエリート形成」から次のことがわかる。①表出的エリート（ここには「宗教家」と「芸術家」が含まれ，この「芸術家」の中に文芸家が含まれる）は平均年齢が70.50歳と領域別のエリートの平均年齢の中で最も高い（エリート全体の平均は64.41歳）。②出身階層に関しては，専門職階層出身者がかなり多くなっているものの，どちらかといえば開放的である。③学歴に関しても旧七帝大，一橋大，東京工業大の９大学の出身者の比率が18.9%（エリート全体では38.1%），逆に初等教育出身者の比率が８.1%（エリート全体では3.1%）となっており，「高学歴的背景の薄いチャンネル」[30]である。④ただし，両親の学歴はかなり高くなっており，高等教育出身者の比率は，父親の場合には62.5%（エリート全体では34.3%），母親の場合には12.5%（エリート全体では6.6%）である。

第二に，萬成の研究では，明治・大正・昭和の各時代について，政界，産業界，文化界から各100人

を抽出し，出生地，出身階層・族籍，学歴の三点について吟味している。ただし，抽出の基準は明確ではない。この「文化界」というカテゴリーの中に，大学教授，美術家とともに文芸家が含まれている。ここからは，以下のことがわかる（ただし，学歴に関する部分以外の知見は，大学教授なども含めた文化界全般についての知見であることに留意が必要である）。①出生地はかなり都市圏に偏っており，例えば東京の出身者が大正期で26%，昭和期で28%にも達している。②出身階層・族籍に関しては，特に武士階級，専門職階層の出身者が多いことが特徴的な点である。具体的には，公卿・大名・武士階級出身者の比率は，明治期には70%，大正期でも50%になる。また，専門職階層出身者の比率は，大正期には36%，昭和期には33%となっている。③学歴の分析については，芸術・芸能家と学者とが区別されている。分析結果によると，学者の学歴はかなり高いのに対し，芸術・芸能家のそれは極めて低い。つまり，芸術・芸能家の学歴については，高等教育出身者は明治期には17%，大正期には6%，昭和期でも12%にしかならない。逆に，小学校以下，あるいは徒弟教育を受けた者の比率は，明治期には76%，大正期には58%，昭和期でも28%に達している。

第三に，中道の研究では，1969年時点の各領域の指導者を『人事興信録』より抽出し，記載事項を分析するとともに，抽出された指導者を対象に質問紙調査を行っている。この研究では，「文学，芸術家」というカテゴリーに文芸家は含まれており，このカテゴリーがサンプル全体に占める比率は1.8%である。ここからわかることは次の通りである。①上流階層出身者は28.6%，世襲率は0%であり，他の諸領域のエリートと比べると，いずれについてもかなり低いといえる。②「文学・芸術家」は「学歴よりはむしろ独自の才能を重視される」[31] ため，他の領域の指導者に比べると学歴は低くなっている。具体的にはサンプル17名中，東京帝大出身者は4名，それに対して初等・中等教育出身者が4名となっている。

以上の先行研究から，得られる知見は次の二点である。すなわち，①出身階層に関しては，他のエリートに比べると開放的であり，②学歴に関しても，他のエリートに比べると低いのである。つまり，文芸エリートは，特定の文化・教育を背景に登場するのではなく，レッセ・フェールの過程から個々人の才能によって登場するということになるのである。このような見解は，広く一般に流布している仮説とも一致するであろう。この仮説の問題点については後述することとする。なお，これらの先行研究の技術的問題点としては，①いずれもサンプル数が僅少であること，②「芸術家」，「文化界」，「文学，芸術家」というカテゴリーが具体的にどの様な人物を含むのか，その抽出基準がはなはだ曖昧であり，文芸家以外の人物も含まれていること，の二点があげられる。これらの問題点は根本的なものであり，したがって導出された結論がはたして妥当なものであるかどうか，今一度吟味してみる必要があると考えられるのである。

②文学社会学における文芸家の研究状況

一方，文学社会学の領域では，エスカルピ[32]，ゴルドマン[33]，ベルク[34] らの業績が出色であるといえる。しかし，文芸への主体的評価，芸術的評論ではなく，文芸の担い手の社会構成を検討したのはエスカルピのみである。そこで，ここではエスカルピの研究を概観することとしよう。

エスカルピは，「生産」，「分配」，「消費」の三側面から文学の社会学的研究を行った。われわれ

の関心は，このうちの「生産」の中の作家の起源というところにある。エスカルピはまず，6つの時期の間における作家の出生密度の配分を人文地理学的に検討した。その結果，作家の出生地は王領から諸地方へ，そして最後の時代になって都市へと変転することがわかった。特に，最後の時代について，エスカルピは大学の所在地との関連を示唆している。

次に，エスカルピは，19世紀におけるイギリスとフランスの作家の父親の職業と本人の職業の比較をした。ただし，この調査対象となった作家がどのような基準によって抽出されたのかについては触れられていない。分析の結果，イギリスでは比較的広い層から作家が輩出されているが，特に聖職者層の輩出率が高いのに対し，フランスでも比較的広い層から作家が輩出されているが，特に陸海軍人層の出身者が多い，ということが明らかにされている。一方，本人の職業についてみると，両国とも約半数が専業文芸家であり，残りの多くも官公吏，自由職業・教授である，ということである。この知見から，エスカルピは「社会階級の中の中間層への集中化が生じた」と結論を引き出しているのである。

エスカルピの研究は貴重な先駆的業績ではあるが，しかし，サンプルの抽出の方法に不明瞭な点を残すなど，多くの問題点を抱えていると思われるのである。

以上，文芸エリートの社会的構成について，先行のエリート社会学，文芸社会学の知見を概観してきた。明らかになったことは，結論の当否は別としても，ほとんど計量的に信頼するに足る先行研究がないということである。このような文芸エリート研究不振の原因は，私見では次のような四つの事由によるものと思われる。

まず，第一には，ごく最近にいたるまで国文学界内部では，江戸期以降の文学が研究対象として非常に軽んじられ，場合によってはタブー視されてきたという経緯があげられる。昭和30年代になるまで，大学の国文学の講義は基本的には，平安時代以前の文学に対象が限定され，また教授・学生の研究対象も平安時代以前の文学・文学者に対象が限定されていたのである。昭和30年代に入ってようやく，私立大学の大学院生を中心とする若手研究者の間で近現代文学を専攻する者が増加し，現在では研究の質量ともに他の時代に劣らないほどになっている。しかし，現在なお，旧七帝大などでは，古典に偏した教育・研究が続けられているようである。このような事情から，近現代文芸家の研究は，社会学界のみならず，国文学界でも大いに遅れをとってきたのである。

第二に，文芸という領域で必要とされる能力が，いわば天賦の素養であり，少なくとも学校教育制度によって養成されるものではないという見解が，一般に流布していることがあげられる。なるほど，詰め込み教育だの，画一的だのと，何かと批判かまびすしい学校教育などによって，文芸家にとって必要なみずみずしい感性が養成されるとは考えられないというのは，正論であろう。しかし，ここではあえて，文芸エリートの形成にとって高等教育が機能している，という仮説をたてておきたい。すなわち，高等教育の教育内容そのものではなく，高等教育のインフォーマルな側面ー例えば，同人誌・文芸サークルを通じたインフォーマル・グループの形成などーが文芸エリートの形成に大きな役割を演じたのではないかと考えるのである。そして，逆にこのように高等教育機関を主たる媒介として文芸エリートが登場するが故に，近代日本の文芸が多様な中にも一定の方向性を持っていたのではないか，という仮説をたてておきたい。もちろん，この仮説を現実に立証する

のは非常に困難であり，少なくとも詳細なケース・スタディーを行うことなしには不可能であろう。しかし，ここではとりあえず通説への反証として，文芸エリートの学歴構成が高等教育，その中でも特定の大学に集中しているという，社会的構成上の歪みを指摘したいと思う。

ともあれ，文芸エリートは教育制度を通じて形成されるものではないという見解が一般に流布しており，またこのような見解がエリート研究者の間でも暗黙の内に受け入れられてきたことが，研究の不振の一因であろう。

第三に，文芸という領域がいわば分析的解釈を拒絶し，個人の審美観に訴える領域であるということがあげられる。つまり，文芸という領域は，そもそもエリートなどという言葉が馴染まない領域なのである。さらに，エリートのメルクマールについてコンセンサスを形成しにくいことが研究の進展を阻害している。政治家，軍人，財界人，官僚などの場合であれば，エリートとしてのメルクマールはーその妥当性は別としてもー組織内での地位を基準にして明確に設定し得る。しかし，文芸エリートの場合には，エリートの基準の設定ははなはだ困難である。

文芸家の場合，エリートの基準については，二つの見解があり得よう。一つは，文芸家協会，ペンクラブなどの文芸諸団体で指導的地位についている重鎮を指示する場合である。この場合には，政治家，軍人などの場合同様，組織内での地位を基準にしたメルクマールが用いられることになる。もう一つは，秀抜な作品を創作した文芸家を指示する場合である。この二つの定義は重なり合う面もあるけれども，基本的には異なると思われる。

たしかに，エリートとノン・エリートとを峻別する主たる基準とは，権力の有無に外ならないという考え方もあり，したがって前者の基準をもって妥当であると考えることも不可能ではない。ただし，この基準を採用した場合には，他の諸領域のエリート同様，文芸エリートの影響力は生前のそれに限定されることになる。しかし，冒頭にも述べたように，文芸エリートの特質は，死後も創作を通じて，国民の価値形成に影響を及ぼす点にある，と筆者は考える。したがって，筆者にとっては，かかる定義では納得し難いのである。しかも，早世した優れた文芸家が，このような基準を用いた場合，漏れる傾向にあるのも問題である。

また，後者の基準については，さらに二つの下位区分を考えることができる。すなわち，作品を対象にする場合と作家を対象にする場合とである。作品を対象にする場合の基準としては，例えば，各種文学賞を受賞したかどうかという基準が考えられるだろう。なるほど，各種文学賞は社会的インパクトの大きい作品に授与されるのであるし，受賞するような優れた作品の多くは，永く後世に影響力を残すと考えられるから，この基準をもって妥当とすることも考えられよう。

しかし，受賞して一躍文芸界の寵児となったのはいいが，その後は全く冴えない創作生活を送る者が少なくはないことは文学史の教えるとおりであるし，このような文芸家を文芸エリートとして分析対象にすることには疑問が残るだろう。私見では，そもそも各種文学賞などというのは，その作品に内在する芸術的価値を評価する以上に，むしろ社会的反響を評価するものであり，場合によっては優れて政治的な問題にもなり得る，と思われるのである。実際に，このような作家の中には単に時流に迎合したが故に一世を風靡したというだけで，時代が変化すれば忘却の彼方へと消え去ってしまう作家も多く，筆者の考える文芸エリート像には合致しないのである。永く後世に影響力

を残し，教科書などに制度化され，正統化された形で国民を教化する，そのような人物を文芸エリートと考える以上，文芸家としての力量を判定する基準を設定する必要があるのである。本稿では，この基準によって文芸エリートを抽出することになる。

いずれにせよ，文芸の領域におけるエリート概念の定義の困難さが研究を阻害する要因であることは間違いないだろう。

第四の要因として，文芸エリートに限らず，文化エリート一般を軽視する風潮があげられよう。たしかに，ミルズが指摘した通り，近現代においてはコマンド・ポストは，政治，産業，軍事の各領域のエリートに集約的に配分されるから，文化エリートなどはパワー・エリート，カウンター・エリートなどの周辺で支持的な役割を演じるに過ぎないという見方もあろう。また，彼らの近代化に果たす役割もせいぜい間接的なものでしかないという見方もあろう。しかし，少なくとも文芸エリートに関しては，彼らの生前はもとよりその死後も，出版物を通してその精神を後世に伝達し続け，国民の価値形成に直接的な影響力を持ったのである。彼らの活躍の舞台は，近代ジャーナリズムの台頭，出版文化の隆盛にともない拡大し，影響力も増したであろう。ことに，教科書に掲載されるなど正統化・制度化された形で伝達される場合には，相当な影響力を持つこととなると思われる。この点が政治家，軍人など生前にしか影響力を持たないエリートと異なる点である。したがって，ある意味では，優れてアクチュアルな問題でもあり，重要な問題であると思われるのである。それにも関わらず，文芸エリートの，エリートとしての価値が過小評価されていることが，研究の進展を阻害する要因の一つであると思う。

以上のような概念規定の困難さと偏見とに嚮導されて，文芸エリートの研究は著しく遅れていると思われるのである。この現状認識に立脚して，本稿では近代日本における文芸エリートの構成とその時系列的変遷をまず検討する。その際，特に学歴に注目して分析を行うこととする。

2．中世・近世日本における文芸エリートの構成

具体的な分析を行う前に，中世・近世日本の文芸エリートの特質について概観しておこう。中世・近世の文芸は，宮廷文芸，町人文芸等，封建制度下の身分階級を基盤として成立していた。ただし，町人階級が台頭するのは近世に入ってからであり，中世文芸は貴族，武士階級に独占されていたと言っても過言ではない。「文士」などという言葉はこれを象徴するものである。

例えば，国文学者，佐々木克衛は近世に及んで町人文芸が台頭する理由を次のようにまとめている[35]。つまり，①徳川幕府の文治政策による保護，②寺子屋等の普及による文盲率の低下と知識欲の増大，③印刷術の発展と出版企業の出現，④太平の世の中での町人階級の富の蓄積，である。ただし「武士は武士としての学問，芸術，文学等を生み，町人は町人としての文化，文学を持った」[36]のであり，この二つの身分階級の文芸は，その書き手も読み手も基本的には自階級内に求め，両者の接点はほとんどなかったのである。もちろん，文芸家個々について考えれば，武士階級の出身で町人文芸の担い手となった井原西鶴のように，例外を列挙することはできる。しかし，ここでは，あくまでも文芸界の大勢としては，以上のような考え方が妥当なのではないかといってい

るのに過ぎない。また，農民階級が，少なくともコマーシャルな意味においては独自の文芸を持たなかったということも，あわせて指摘できよう。

同様の指摘は，国文学者である関良一にも見られる。関によれば，「近世の社会は，大体のところ，士・農・工・商の四階級に分かれていた。したがって，文学も，武士の文学と町人の文学とに分かれていた。もちろん，現実には階級の混淆があり，後期から末期にかけては特にそうであり，文学の世界でも，たとえば戯作（近世中期にはキサクまたはギサク，文化文政期にはいってケサク，またはゲサクとよばれた）者＝柳亭種彦は御家人の出であったというようなぐあいだったし，また，農民の文学もないことはなかったし，事実，俳諧・和歌・国学などのある部分の担当者は農民だったらしいが」ということである[37]。つまり，一定の例外はあるものの，身分階級を基盤とした文芸界が形成されていたという点において，上記の佐々木の指摘を支持しているのである。

また，関は「日本の『近代』小説が，翻訳小説・政治小説はもとより戯作系の小説でさえも，主として士族＝知識人，それも主として反藩閥政府側の士族＝知識人によって推進された」[38]という極めて重要な指摘をしている。すなわち，「近代著名の文人のうち，官軍＝藩閥政府系の文人は鷗外ただひとりで，あとは江戸系・幕府系であった」[39]のである。つまり，大枠では文芸エリートは政治エリートと同じルーツを持つけれども，細かく検討すれば，異質な，場合によっては相容れないルーツを持っている，というのである。

ところで，以上の知見を先の「エリート社会学における文芸家の研究状況」及び，「文芸社会学における文芸家の研究状況」において得られた知見と比較考察すると，その不連続性が明確になる。すなわち，仮に先行研究で示唆されたように近代の文芸エリートがレッセ・フェールの過程から登場するのであれば，中世・近世における文芸エリートの供給基盤が身分階級であったのに対し，近代に入って急速に供給基盤を失ったことになる，ということである。はたして，このようなドラスティックな変化が，いつから起こったのか，あるいは本当に起こったのかは非常に興味深いところであろう。特に，われわれの関心は，学校教育制度，特に高等教育制度の発足，発展が文芸エリートの供給基盤に何らかの影響をもたらしたのか否か，という点にある。この点を次節で検討していくこととしよう。

3．近代日本の文芸エリートの構成

ここで，近代日本の文芸エリートの社会的構成について検討しよう。この問題に関しては，すでに別稿[40]で他の領域のエリートとの比較考察という形で論じてはいるが，その後得られた知見を加えて再度ここで論じることとする。なお，文芸エリートの活動領域別分布あるいは学歴別の活動領域占有率の分析をここでは省略したので，関心のある方は別稿を参照されたい。

まず，文芸エリートのサンプルをどのようなインデックスとメルクマールによって抽出したのか，について述べる必要があろう。文芸家のインデックスとしては，講談社刊行の『日本近代文学大事典　机上版』（1982年）を用いた。すなわち，この事典に記載された人物を文芸家であると判断したのである。この事典は，特定団体のプロパガンダ誌紙，学会誌のみに執筆していた者を除きつつ，

一般・大衆誌紙において高水準の文芸活動を行った文芸家を広く各領域にわたって網羅している。記載人名数は5700名弱にも達している。記載人名数，記載内容の精度，確度において，管見に入った限りでは，この事典は現在最高水準にあるといえる。

また，文芸家としての力量，すなわちエリートであるか否かを判断するメルクマールとしては，前述のように筆者は創作，評論の質を判定するという立場に立つため，個人全集が刊行されたかどうかという点に求めることとした。個人全集（全仕事）が刊行されるということは，その文芸家の創作，評論が一定の水準に達しており，文学的・社会的影響力があったことの証左であると考えられる。もちろん，寡作な文学者，早世した文学者は全集が出されやすく，逆に生産的な（往々にして長生きした）文学者は全集が出されにくいという問題点はあるだろう。さらには，出版業界への政治的影響力をもっているかどうか，あるいはそういう影響力を持つ有力者と親密な交際があるかどうか，人脈的ネットワークの広がりはどうかなど，創作の質とは直接的には無関係な要因も影響するであろう。このため，サンプルには一部エリートの遺漏と一部ノン・エリートの混入という問題が生じることになる。また，全集とは名ばかりで，実際には編集者の意図によって取捨選択がなされていることもあるし，生前に出た全集などはもとより真の意味での全集ではない。しかし，文芸家としての力量，文学的・社会的影響力を，創作の質に基づいて判断するための客観的なメルクマールとしては，様々な問題点はあるものの，妥当な指標であると思われるし，この他には妥当な指標は見いだし得ない。

以上の抽出手続きにより，458名の文芸エリートが抽出される。これは事典の記載人名数の８％強に相当する。また，女性はこのうち30名を数える。なお，全集の刊行が企画され，部分的に刊行されたが中絶した者，あるいは現在刊行中の者等もサンプルに含めた。

次に時期区分について述べておこう。ここでは，文芸エリートをその生年によって５つのコーホートに区分する。第Ⅰ期は1859年以前に出生したコーホートで，近代学校教育制度の洗礼を受けないで文芸界に登場した者が多い。また，明治初期以降になってから活躍する者が多く，1840年以降の出生者が60％を占める。最も早く出生したのは大田垣蓮月（1791～1875）であり，他に福沢諭吉などが含まれている。第Ⅱ期は1860年から1879年までに出生し，近代学校教育制度を通過して，明治中期以降に活躍するコーホートである。近代日本文芸界の巨頭といわれた，森鷗外，夏目漱石，二葉亭四迷などが含まれる。第Ⅲ期は1880年から1894年までに出生し，明治後期以降に活躍するコーホートである。大山郁夫などの社会運動家，芥川龍之介など漱石の弟子達，志賀直哉などの白樺派や，谷崎潤一郎などが含まれる。第Ⅳ期は1895年から1904年までに出生し，大正期以降に活躍するコーホートである。小林多喜二などのプロレタリア文学者，川端康成などの新感覚派や，小林秀雄などが含まれる。第Ⅴ期は1905年以降に出生し，昭和期に活躍するコーホートである。ここには昭和生まれの者が13名含まれ，うち６名は新制学校教育制度の卒業生である。最も遅く出生したのは岸上大作（1939～1960）であり，他には太宰治などの無頼派，島尾敏雄などの「第三の新人」，三島由起夫などが含まれる。各時期の人数はそれぞれ30人，92人，126人，110人，100人で，そのうち女性はそれぞれ，１人，５人，７人，12人，５人である。

①出身地

まず，出身地を検討しよう。ここでいう出身地とは本人の出生地のことである。表1を参照されたい。東京出身者が各時期とも20%前後を占め，関東，大阪，近畿の各出身者を合わせると40%～50%を占めている。つまり，文芸エリートは大都市及び，その近郊から約半数が供給されており，その傾向には時期的変化はないということである。

もちろん，このような傾向は，他の領域のエリートにもみられることであるけれども，文芸エリートの場合には，とりわけ東京の出身者が多いようである。

表1　文芸エリートの出身地別分布（%）

	北海道	東北	東京	関東	甲信越	北陸	東海	大阪	近畿	中国	四国	九州	海外	合計(N)
第Ⅰ期	0.0	6.7	30.0	10.0	3.3	3.3	6.7	3.3	6.7	3.3	10.0	13.3	3.3	100(30)
第Ⅱ期	0.0	8.7	19.6	13.0	7.6	7.6	7.6	4.3	6.5	13.0	8.7	3.3	0.0	100(92)
第Ⅲ期	1.6	7.1	26.2	14.3	5.6	3.2	7.1	1.6	7.9	10.3	3.2	11.9	0.0	100(126)
第Ⅳ期	5.5	8.2	17.3	10.9	8.2	1.8	6.4	5.5	7.3	10.0	7.3	10.9	0.9	100(110)
第Ⅴ期	6.0	3.0	25.0	5.0	7.0	6.0	4.0	9.0	10.0	6.0	3.0	13.0	3.0	100(100)
全　体	3.1	6.8	22.7	11.1	6.6	4.4	6.3	4.8	7.9	9.6	5.7	10.0	1.1	100(458)
内女性	0.0	3.3	33.3	6.7	6.7	3.3	3.3	3.3	6.7	13.3	3.3	16.7	0.0	100(30)

②出身階層

次に，表2には文芸エリートの出身階層を記した。ここでいう出身階層とは，出生時の父親の職業を指している。諸説ある者，不明者，父親不在の者などが多く，判明率は各時期とも70%代と信頼性をやや欠いている。しかし，マクロな傾向を把握するということであれば大きな問題はないと思われる。

第Ⅰ期と第Ⅱ期は資料の制約から，族籍＝封建身分階級を用いた。第Ⅰ期，第Ⅱ期ともに武士階級出身者の比重が極めて大きい一方で，町人階級出身者も増加していることが解る。しかし，農民階級出身者は僅少である。

また，第Ⅲ期から第Ⅴ期までは，職業階層を用いて区分した。専門職階層出身者が各時期とも多いのが目立つ。専門職階層が近代日本においては，全人口の1%前後であった点を考慮すれば，この階層は文芸エリートを特に輩出しやすかった階層であったといえよう。管理職階層も全人口に占める比率は2%を越えなかったにも関わらず，各時期の文芸エリートの12%から22%がこの階層の

表2　文芸エリートの出身階層別分布（%）

	武士階級		町人階級		農民階級			合計(N)
第Ⅰ期	81.8		18.2		0.0			100(22)
第Ⅱ期	63.9		25.0		11.1			100(72)
	専　門	管　理	事　務	販　売	労働者	地　主	農漁民	
第Ⅲ期	33.7	22.1	12.6	16.8	2.1	5.3	7.4	100(95)
第Ⅳ期	22.6	11.9	16.7	15.5	13.1	6.0	14.3	100(84)
第Ⅴ期	41.4	18.6	10.0	17.1	5.7	2.9	4.3	100(70)

出身者である。逆に，文芸エリートを輩出しにくい階層は，労働者階層と農漁民階層，特に農漁民階層である。農漁業従事者は明治初期には80%，昭和初期でも過半数に達していたにも関わらず，各時期にこの階層から輩出された文芸エリートはそれぞれ7%，14%，4%と僅少である。他の領域のエリートの出身階層と比べた場合，高階層出身者が多いという点では一致しているのであるが，文芸エリートの場合にはこの傾向が特に顕著に認められるのであり，専門職階層出身者の比率が他のエリートに比べてかなり多くなっているのである。

このような結果は，文芸エリートの出身階層が恵まれた階層であったということと同時に，古い家父長制的体質の「イエ」の束縛から比較的自由な階層であったのではないか，ということを推測させる。このため，文芸エリートは一般国民のみならず，エリート一般と比べても，より自由な，開明的な精神を持ち得る環境に育ったといえるのではないだろうか。なお，文芸エリートの生育環境に関わる出自の変数として，出生地，出身階層と同様に，出生順位が重要であると思われるが，残念ながら十分な情報が得られていないため，以上の推測を確実なものにするだけの論拠はない。

ところで，第Ⅳ期にはその前後のコーホートの階層構成とは異なる傾向が見られる。つまり，専門職，管理職階層出身者の比率が低下し，労働者，農漁民階層出身者の比率が上昇している。この原因はプロレタリア文化・芸術運動のインパクトに求められよう。

周知のとおり，プロレタリア文化・芸術運動は特に昭和初頭に大きな潮流をなした，ナップ（NAPF＝全日本無産者芸術連盟，後に全日本無産者芸術団体協議会），コップ（KOPF＝日本プロレタリア文化連盟，プロット，プロキノ，モップル，ナルプ，プロ科などの芸術諸団体の連合体）などの指導による文化運動である。この運動は「階級闘争のための文化・芸術」を標榜し，既成文芸界にインパクトを与えた。プロレタリア文化・芸術運動の著名な論客としては，宮本顕治，小林多喜二，蔵原惟人，中野重治，鹿地亘らをあげることができる。彼らトップの指導者はいずれも高等教育学歴を有していたが，しかし，一般の運動員には初等教育学歴，中等教育学歴しか有しない者が多かった。また，トップの指導者には東京帝大新人会や左翼文芸サークルの出身者が多いのに対し，一般の運動員には労働組合出身者が多かった。女性の占める比率が，既成文芸界に比べれば高かったことも大きな特徴である。

プロレタリア文化・芸術運動にコミットした文芸エリートを抽出して，その社会構成上の特性を検討することは，重要な課題ではあるけれども，実際には，困難である。というのは，プロレタリア文化・芸術運動にコミットしたか否かの峻別が非常に困難であるからに他ならない。単なるシンパだった者から共産党員になっていた者まで，どこに基準を設けるべきか，また転向した者，再転向した者をどう扱うかなど，コミットの程度を判断するのははなはだ困難である。表3には，筆者の全く恣意的な選択によって，プロレタリア文化・芸術運動の闘士として著名な文芸家を30名リスト・アップした。ただし，この中には，個人全集が刊行されておらず，したがって本稿でいう文芸エリートではない者も14名含まれている。

しかし，そのような留保付きではあるけれども，この表3に掲げられた30名の著名なプロレタリア文化・芸術運動家のリストから，いくつかの特徴が明らかになる。すなわち，前節で述べた時期区分に当てはめるならば23名が第Ⅳ期，4名が第Ⅲ期，3名が第Ⅴ期に出生したこととなる。また，

表3　主要なプロレタリア文化・芸術運動の文芸家たち

氏名	全集	生年・没年	出生地	出生時の父の職業	学歴
青野　季吉		1890～1961	新　潟	地主	早稲田大英文科卒業
新井　　徹	◎	1899～1944	長　崎	?	広島高等師範国文科卒業
伊藤永之介		1903～1959	秋　田	菓子屋	尋常小学校卒業
江口　　渙		1887～1975	東　京	陸軍軍医	四高→五高→東京帝大英文科中退
大宅　壮一	◎	1900～1970	大　阪	味噌醤油醸造業	三高→東京帝大社会学科中退
小熊　秀雄		1901～1940	北海道	洋服仕立職人	高等小学校卒業
鹿地　　亘		1903～1982	大　分	?	一高→東京帝大国文科卒業
片岡　鉄兵	◎	1894～1944	岡　山	?	慶応義塾大仏文科予科中退
勝本清一郎		1899～1967	東　京	鋼材商経営	慶応義塾大美術史科卒業
嘉村　磯太	◎	1897～1933	山　口	地主	中学中退
窪川鶴次郎		1903～1974	静　岡	開業医	四高中退
蔵原　惟人		1902～1991	東　京	帝国教育会幹事長	東京外語露語卒業
黒島　伝治	◎	1898～1943	香　川	半農半漁	早稲田大高等予科文科中退
小林多喜二	◎	1903～1933	秋　田	没落農家	小樽高商卒業
佐多　稲子	◎	1904～	長　崎	三菱造船所	尋常小学校中退
田木　　繁	◎	1907～	和歌山	海軍軍人	三高→京都帝大独文科卒業
武田麟太郎	◎	1904～1946	大　阪	巡査	三高→東京帝大仏文科除籍
壷井　　栄	◎	1899～1967	香　川	樽職	高等小学校卒業
壷井　繁治	◎	1897～1975	香　川	農業	早稲田大英文科中退
徳永　　直		1899～1958	熊　本	小作農	尋常小学校中退
中野　重治	◎	1902～1979	福　井	自作・小地主	四高→東京帝大独文科卒業
林　　房雄		1903～1975	大　分	雑貨商・旅館経営	五高→東京帝大法学部中退
林　芙美子	◎	1903～1951	山　口	?	高女卒業
葉山　嘉樹	◎	1894～1945	福　岡	京都郡郡長	早稲田大高等予科文科除籍
平林たい子	◎	1905～1972	長　野	?	高女卒業
藤沢　桓夫		1904～1989	大　阪	漢学者	大阪高→東京帝大国文科卒業
宮本　顕治		1908～	山　口	?	松山高→東京帝大経済学部卒業
宮本百合子	◎	1899～1951	東　京	文部省技師	日本女子大英文科中退
三好　十郎		1902～1958	佐　賀	農業	早稲田大英文科卒業
村山　知義		1901～1977	東　京	海軍軍医	一高→東京帝大哲学科中退

全集欄の◎は個人全集が発刊されている(すなわち文芸エリートのサンプルとして取り上げられた)ことを示す

第Ⅳ期に属さない7名も1887年から1908年までの22年間に集中しており，プロレタリア文化・芸術運動はかなりの程度，明治後期生まれの世代に特有な文芸スタイルであるといえるのである。出生地構成に関しては，文芸エリート一般と大差はないだろう。また，出身階層に関しては，父職の判明している24名中10名が自営業，農業，労働者階層の出身である。つまり予測通り，文芸エリート一般に比べてかなり低階層出身者を包蔵しているのである。しかし，学歴構成については東京帝大出身者を9名含むなどかなり高学歴者が多く，次項でみる文芸エリート一般の学歴構成と大差はない。

つまり，プロレタリア文化・芸術運動に従事した文芸家には，大都市圏・低階層出身の高学歴者が多かったのである。また，女性や労働者・農漁民階層出身者など従来の文芸界では多数を占めな

かったグループからも多くの才能を発掘・育成したのである。文芸エリート一般と比較するならば，出生地，学歴についてはほぼ同根，出身階層的には異根といえよう。次項で明らかになるように，文芸エリート一般の場合は特定の高等教育機関を媒介にして文芸界に登場するのだが，プロレタリア文化・芸術運動に従事した文芸家の場合にもまたその傾向が観察されるのである。

③最終学歴

表4～表7は文芸エリートの学歴，卒業率，専攻分野について男女別に検討したものである。表に第Ⅱ期以降しか掲げていないのは，第Ⅰ期には近代学校教育制度を通過した者が少ないためである。ちなみに，第Ⅰ期には大学南校出身者が2名，慶応義塾出身者が3名，官庁の教育機関出身者が2名，他の学校出身者が3名いる。つまり30名中10名が近代学校教育を受けているということである。なお，女性については実数が少ないので，期別には算出していない。

では，表4をもとに文芸エリートの最終学歴を検討しよう。ここでいう最終学歴とは，卒業した者だけでなく，中退した者も含む。

表4によると，第Ⅱ期から第Ⅴ期まで基本的には学歴構成に大きな変化はないといえるだろう。東京帝大出身者は第Ⅱ期，第Ⅲ期には31%を占め，第Ⅳ期，第Ⅴ期にもやや比率は低下するものの24%を占め，各時期とも最大のグループである。京都帝大出身者は，第Ⅲ期から第Ⅴ期まで徐々に比重を増している。早大系統出身者は第Ⅴ期を除いて13%以上と東京帝大に次ぐ勢力を持っていた。慶大系統出身者は終始10%未満であった。また，東京帝大，京都帝大以外の五帝大出身の文芸エリートは5名と僅少である。これら七帝大と早慶大系統以外の高等教育機関は，所在地によって二分した。東京の高等教育出身者の比率は，各時期とも他の地域にある高等教育出身者の比率を上回っていることが解る。これと，東京帝大，早慶大系統をあわせると，第Ⅱ期から第Ⅴ期まで東京の高等教育出身者が，それぞれ63%，73%，58%，58%を占める。このことから，東京の高等教育機関へ

表4　文芸エリートの学歴別分布（%）

〈男性〉

	東京帝大	京都帝大	早大系統	慶大系統	他の帝大	高等教育 東京	高等教育 他	中等教育	初等教育	合計(N)
第Ⅱ期	30.9	0.0	13.6	2.5	0.0	16.0	12.3	18.5	6.2	100(81)
第Ⅲ期	30.5	4.2	22.9	9.3	0.0	10.2	2.5	13.6	6.8	100(118)
第Ⅳ期	24.2	8.4	14.7	5.3	1.1	13.7	4.2	17.9	10.4	100(95)
第Ⅴ期	24.7	8.6	7.5	8.6	4.3	17.2	10.8	12.9	5.4	100(93)
全　体	27.6	5.4	15.2	6.7	1.3	14.0	7.0	15.5	7.2	100(387)

〈女性〉

	日本女子大学校	東京女子高等師範	中等教育	初等教育	合計(N)
全　体	13.8	3.4	69.0	13.8	100(29)

「早大系統」とは早稲田大学本科，予科，高等学院，及び前身の東京専門学校出身者を指し，「慶大系統」とは慶応義塾大学本科，予科，及び前身の慶応義塾出身者を指す。また，本稿でいう出身者には中退者が含まれている。

進学することが文芸エリートにとっていかに重要であるかが解るであろう。東京帝大，京都帝大以外の五帝大はその高い威信にも関わらず，文芸エリートをほとんど輩出しなかったし，同志社のように伝統ある高等教育機関もほとんど輩出していないという結果は，そのことを傍証している。

なお，中等教育出身者は15％前後，初等教育出身者は，第Ⅳ期を除くと６％前後に留まっている。つまり，男性の場合には，高等教育出身者が各時期とも72％を越えているのである。この教育水準が当時の一般男性の教育水準と乖離していることは説明を要しないであろう。一方，女性の場合は中等教育出身者が70％，高等教育出身者が17％とこれも当時の一般女性の教育水準を大きく上回る。

ところで，他の諸領域のエリートの学歴構成と比べた場合に，文芸エリートの学歴構成の特異な点は，ほとんど学歴構成比が変化していないということである。他の諸領域のエリートの場合であれば，社会全体の高学歴化の波の中で，漸次学歴構成が高度化していく。この場合，高等教育学歴は徐々にエリート形成にとって必要不可欠な意味を持つようになったということを意味するのに過ぎない。しかし，文芸エリートの学歴構成を見ると，近代文壇は初期から高等教育学歴を必須の条件としたと結論できるだろう。つまり，近代日本の文芸エリートは学歴を供給基盤とするエリートだったのであり，まさしく「学歴エリート」だったのである。では，具体的に高等教育学歴はいかなる意味で必要とされたのか，この点に関する考察を続く三つの項で深めていこう。

④東京，京都両帝大出身者の出身高校

東京の高等教育出身者のうち私大出身者は予科から進学すると考えられるので，概ね10代後半に

表５　東京，京都両帝大出身文芸エリートの出身高校別分布

（％）

	一高	三高	他のＮＳ	他旧制高校Ⅰ	他旧制高校Ⅱ	その他	合計（Ｎ）
〈東京帝大〉							
第Ⅱ期	52.0	4.0	24.0	0.0	4.0	16.0	100（ 25）
第Ⅲ期	61.1	11.1	11.1	13.9	0.0	2.8	100（ 36）
第Ⅳ期	39.1	39.1	17.4	0.0	4.3	0.0	100（ 23）
第Ⅴ期	26.1	0.0	8.7	30.4	30.4	4.3	100（ 23）
全　体	46.7	13.1	15.0	11.2	8.4	5.6	100（107）
〈京都帝大〉							
第Ⅲ期	60.0	0.0	20.0	0.0	0.0	20.0	100（ 5）
第Ⅳ期	25.0	37.5	0.0	0.0	25.0	12.5	100（ 8）
第Ⅴ期	0.0	42.9	14.3	14.3	28.6	0.0	100（ 7）
全　体	25.0	30.0	10.0	5.0	20.0	10.0	100（ 20）

「他のＮＳ」とは一高，三高以外のナンバー・スクールを指す。「他旧制高校Ⅰ」とは浦和高校，東京高校，大阪高校，成城高校及び学習院高等科を指し，「他旧制高校Ⅱ」とはその他の旧制高校を指す。「その他」とは高等専門学校などからの進学者を指す。

は東京に集結していることになる。では，東京，京都両帝大出身者の場合，いかなる地域のいかなる高校の出身者が多かったのであろうか。一般に，文学者が文芸活動を開始する時期が，10代後半から20代前半と比較的早期であることを考えると，文芸エリートがいかなる高校に進学するかということは重要な問題である。

表5によると，東京帝大出身者の場合，第Ⅱ期，第Ⅲ期は一高出身者が過半数を占め，第Ⅳ期には三高出身者が台頭し，第Ⅴ期にはナンバー・スクール以外の旧制高校出身者が増加している。しかし，東京，関東，大阪，近畿所在の浦和高校，東京高校，大阪高校，成城高校，学習院高等科の出身者が，その半分を占めている。つまり，多い時期には86%，少ない時期でも56%は東京，関東，大阪，近畿の高校の出身者で占められているのである。京都帝大出身者の場合は一高出身者が少なく，三高出身者が多くなるものの，おおまかな傾向としては東京帝大出身者に同じである。つまり，東京，京都両帝大出身の文芸エリートの多くは，高校進学時にすでに大都市圏の高校，それも一高，三高に代表されるセレクティヴな少数の高校へ進学し，都市文化，旧制高校の知的文化に接触しつつ，文芸活動を開始すると考えられるのである。

⑤卒業率

表4では中退者も含めて最終学歴の分布を検討したので，卒業率を吟味しておく必要があろう。一般的に言えば，文芸エリートはアウト・サイダーというイメージが強く，文芸活動や社会運動に没頭して学業を怠るとか，あるいは授業料滞納とかの理由で，退学，除籍，放校などの処分を受けた者が多いように受け取られているといえるだろう。果してこのイメージは現実を反映しているといえるのであろうか。

表6を参照されたい。東京帝大出身者は85%，京都帝大出身者は90%が卒業している。それに対して，早大系統，慶大系統の出身者はそれぞれ63%，58%しか卒業していない。他の高等教育出身者については，東京の高等教育出身者は78%が卒業したのに対し，他の地域の高等教育出身者は54%しか卒業していない。また，中等教育出身者も54%しか卒業していない。男性の場合には初等教

表6　文芸エリートの学歴別の卒業率（%）

〈男性〉									
	東京帝大	京都帝大	早大系統	慶大系統	他の帝大	高等教育		中等教育	初等教育
						東京	他		
第Ⅱ期	91.7	—	60.0	0.0	—	50.0	60.0	53.3	100
第Ⅲ期	86.1	80.0	69.2	54.5	—	83.3	0.0	23.1	20.0
第Ⅳ期	77.3	100	46.2	25.0	0.0	83.3	75.0	64.7	88.9
第Ⅴ期	81.8	87.5	71.4	100	100	93.3	55.5	72.7	80.0
全　体	84.6	90.0	62.5	58.3	80.0	78.4	53.8	53.6	72.7

〈女性〉				
	日本女子大学校	東京女子高等師範	中等教育	初等教育
全　体	33.3	100	89.5	25.0

育を除くと，帝大→早慶大系統→他の高等教育機関→中等教育機関と，教育機関としての威信が低いほど卒業率も低くなるという傾向を示している。つまり，従来のアウト・サイダーというイメージは教育水準が下がるほど妥当するのであり，帝大出身者などには妥当しないのである。

この結果は，文芸エリートにとっての学歴の意味が，他のエリートにとってのそれとは異なることを示唆するものと思われる。すなわち，当然のことながら，ある種の資格証明としての学士の称号，あるいは卒業証書を必要とするために，高等教育出身者が多くなっているのではないということである。言い換えるならば，高等教育機関のフォーマルな，制度的な側面が文芸エリートの形成に寄与しているのではないということである。この点を専攻分野という別の角度から捉えてみよう。

⑥高等教育機関での専攻

文芸エリートの専攻を東京，京都両帝大と早慶大両系統について学科単位で分類した結果が表7である。東京帝大出身者の場合は，文学を専攻した者が非常に多くなっている。しかし，文学系学科内部での分布を見ると主流が，国文科→英文科→仏文科と変化するなど，分散する傾向にある。それに対し，京都帝大出身者の場合は，哲学科への集中が著しい。これは西田幾多郎の門下へ優秀な哲学青年が集中したためであると思われる。

早大系統出身者の場合は，英文科への集中が著しい。また，哲学専攻は僅少である。早大系統の看板学科である政治経済科には16%の者が在籍し，英文科に次ぐ。また，慶大系統出身者の場合は，文学を専攻した者は50%に過ぎず，前期には慶大系統の看板学科である理財科，後期にはもう一方

表7　文芸エリートの学歴別・専攻分野別分布（%）

	文学					哲学			社会科学	自然科学	医学	合計(N)
	国文	英文	仏文	独文	他	哲学	美学	社会				
〈東京帝大〉												
第Ⅱ期	16.0	8.0	0.0	0.0	16.0	32.0	0.0	0.0	12.0	8.0	8.0	100(25)
第Ⅲ期	13.9	22.2	2.8	5.6	0.0	16.7	0.0	2.8	19.4	2.8	13.9	100(36)
第Ⅳ期	21.7	13.0	17.4	13.0	0.0	0.0	0.0	8.7	26.1	0.0	0.0	100(23)
第Ⅴ期	8.7	17.4	21.7	4.3	17.4	0.0	17.4	0.0	8.7	4.3	0.0	100(23)
全　体	15.0	15.9	9.3	5.6	7.5	13.1	3.7	2.8	16.8	3.7	6.5	100(107)
〈京都帝大〉												
全　体	0.0	14.3	14.3	9.5	14.3	38.1	0.0	0.0	4.8	4.8	0.0	100(21)
〈早大系統〉												
第Ⅱ期	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	22.2	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	100(9)
第Ⅲ期	0.0	73.1	0.0	0.0	11.5	3.8	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0	100(26)
第Ⅳ期	7.1	57.1	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	7.1	0.0	100(14)
第Ⅴ期	28.6	14.3	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	28.6	0.0	0.0	100(7)
全　体	5.4	60.7	5.4	0.0	7.1	3.6	0.0	0.0	16.1	1.8	0.0	100(56)
〈慶大系統〉												
全　体	4.2	12.5	12.5	0.0	20.8	0.0	0.0	0.0	37.5	0.0	12.5	100(24)

の看板学科である医科の出身者が多い。哲学を専攻した者は皆無である。

もし，仮に特定大学の特定学科を基盤にして文芸エリートが登場すると言うのであれば，その学科のフォーマルな教育が文芸エリートの養成に大きく貢献した，あるいはその学科内で作られる何らかのネットワークが文芸エリートとなるのに有利に作用した，あるいはその両方であると判断し得るであろう。しかし，特定大学の特定学科に集中していないのであれば，高等教育のフォーマルな，制度的な側面が文芸エリートの形成に寄与したとは考えられない。東京帝大の場合は，前項で検討した通り，卒業率こそ高かったが，専攻分野が特定学科に集中していないという点から判断して，フォーマルな，制度的な側面が寄与したとは考えられない。京都帝大の場合は，西田幾多郎の下へ優秀な哲学青年が集まったのであり，また西田の論壇への影響力を背景に，多くの文芸エリート（特に評論，哲学の分野）を輩出したと考えられる。つまり，哲学科への集中は，西田のカリスマ的魅力に起因するのである。早大系統の場合は，英文科出身者の比率が第V期に入り低下していることと，卒業率が低かったことから判断して，フォーマルな，制度的な側面が寄与したとは考えられないのである。慶大系統の場合は，卒業の低さ，専攻分野の分散からみて，やはり，フォーマルな，制度的な側面が寄与したとは考えられない。

4．結果の総括と今後の展望

以上の分析結果から，次のような結論を引き出せるであろう。すなわち，近代日本の文芸エリートは，通説には背馳して高等教育を媒介として登場するのである。中世・近世の身分階級を母胎とする供給基盤が弛緩して，学歴を母胎とする供給基盤へと変わってたのである。しかも単なる高等教育機関の出身者でなく，東京帝大，早稲田大，慶応義塾大など東京の高等教育機関の出身者を中心にして供給されていたのである。もちろん，文芸エリートとなるのに必要な素養が正規の高等教育カリキュラムによってはじめて涵養されるなどと主張するわけではない。しかし，同人誌・文芸サークルなどを通して文才の発掘・養成を行うなど，高等教育は少なくともインフォーマルには文芸エリートの形成に関与しており，またそれが近代文芸界へのメイン・ルートだったのではないか，と考えられるのである。

他にも，文芸エリートには他のエリートと比べても，都市・高階層（特に専門職）の出身者が多く，旧来の「イエ」的慣習の桎梏から比較的自由な，開明的な人々であったと考えられるのである。このような背景が，彼らの創作，評論にも大きな影響を与えたとは考えられないであろうか。

さらに，文芸エリートの社会的構成は，著しく硬直的，閉鎖的で，コーホート間にドラスティックな変化を観察できない。特に，近代日本の著しい高学歴化の昂進にもかかわらず，学歴構成がほとんど変化していないという事実は，他の諸領域のエリートの場合とは異なる大きな特徴である。このことは，文芸エリートが機能的，実質的に特定の高学歴を必要としたことを示すのであり，文才に富む低学歴者の参入を一定範囲で許容しつつも，非常に閉鎖的な世界を構築していたことを示すのである。たしかに，プロレタリア文化・芸術運動などのインパクトを受けてある程度の変動を経験するけれども，それは所詮一時的，部分的なものに過ぎず，少なくとも既成文芸界の基本的構

造を変革するにはいたらなかったのである。

最後に今後の課題をあげておこう。近代日本の旧制高等教育は「国家有為の人材」を養成することを第一義としていたため，経済的，政治的領域に重点を置き，文化的人材の育成への制度的取り組みにはあまり熱心ではなかったことは周知の通りである。それにも関わらず，高等教育は文芸エリートの必須条件として機能してきたことが，本稿の分析から明らかになったわけである。だが，特定の高等教育学歴が文芸界において，具体的にどのように機能していたのであろうか。筆者の私見では，旧制高校，大学の文芸サークル・同人誌を通じたインフォーマル・グループの形成＝学閥主義と，それに対応した近代ジャーナリズム界における学閥主義との蜜月関係が最も重要な要因であると思われる。この仮説を実証的に明らかにすることが今後の重要課題である。

また，現代日本における文芸エリートの社会的構成を検討する必要があろう。なぜなら，文芸エリートが高等教育，特にそのインフォーマルな側面を媒介にして登場するというのであれば，戦後の教育制度改革は文芸エリートの形成上，大きなインパクトを持つと考えられるからである。新制学校教育制度は，少なくとも形式上はエリート教育を放棄し，その結果次代を担うエリートの統合性は弱まったという知見が先行のエリート社会学から得られている。このような学校教育制度の変革が，文芸エリートの供給基盤にいかなる影響を及ぼしたのか，あるいは及ぼさなかったのかを検討しなければならない。私見では，旧制高校の知的文化を基盤とした同人誌・文芸サークルは単なる同好会以上の存在，すなわち文芸界へのメインルートを形成する「学閥主義的集団」であり，したがって学校教育制度の改革はこの知的文化を基盤とした同人誌・文芸サークルの解体，すなわち文芸界へのメインルートの解体を意味すると思われる。もしそうだとすれば，文芸エリートにとって高等教育はいかなる意味を持つことになるのであろうか。この問題を考察する上で，まず最初に現代日本における文芸エリートの属性の解明がどうしても必要であると思われる。この課題については，すでに分析を開始しており詳細な成果を近く報告する予定である。

〈注〉

1）C・ライト・ミルズ（鵜飼信成・綿貫譲治訳），1969『パワー・エリート（上・下)』東京大学出版会

2）ハロルド・D・ラスウエル（永井陽之助訳），1969『権力と人間』東京創元社

3）スーザン・ケラー（新堀通也・石田剛訳），1967『現代のエリート』関書院新社

4）ジェライント・パリィ（パワー・エリート研究会訳，代表・中久郎），1982『政治エリート』世界思想社

5）アラン・ジラール（寿里茂訳），1968『エリートの社会学ー社会的成功の要因ー』白水社

6）マイケル・ユシーム（岩城博司・松井和夫監訳），1986『インナー・サークルー世界を動かす陰のエリート群像ー』東洋経済新報社

7）ハリエット・ズッカーマン（金子努監訳），1980『科学エリート』玉川大学出版会

8）ロバート・C・クリストファー（山田進一訳），1990『アメリカの新パワー・エリートー崩壊

するＷＡＳＰ神話－』ＴＢＳブリタニカ
9）青沼吉松，1965『日本の経営層－その出身と性格－』日本経済新聞社
10）萬成博，1965『ビジネス・エリート－日本における経営者の条件－』中央公論社
11）麻生誠のエリート研究に関する文献はかなりの数に上るが，主要な論文は以下のとおりである。著書：1967『エリートと教育』福村出版，1978『エリート形成と教育』（増補版）福村出版，1991『日本の学歴エリート』玉川大学出版会；論文：1961「近代日本におけるエリート構成の変遷」『教育社会学研究第15集』148頁～162頁，1983「現代日本におけるエリート形成－『学歴エリート』を中心にして－」『大阪大学人間科学部創立十周年記念論集』515頁～565頁
また，これらエリート研究を中心とする麻生社会学への評価と批判が以下の文献にみられる。廣田照幸，1990「教育社会学における歴史的・社会史的研究の反省と展望」『教育社会学研究第47集』76頁～107頁，筒井清忠，1990「『近代日本』の歴史社会学的研究－戦後の研究史の展望－」筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学－心性と構造－』木鐸社，11頁～25頁，田中一生，1986「学校社会学方法論の基礎－研究主体の認識カテゴリーと研究手続きをめぐって－」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）第32集』127頁～151頁，田中一生，1990「我が国教育社会学の性格－理論性と実践性をめぐる批判的考察－」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）第36集』1頁～34頁
12）中道実，1973「現代日本における指導層の社会的性格（一）」『ソシオロジ第57号（第18巻第1号）』79頁～103頁，中道実，1974「現代日本における指導層の社会的性格（二）」『ソシオロジ第59号（第18巻第3号）』57頁～89頁
13）岩見和彦・曽和信一・富田英典・中村勝行，1981「社会階層と教育－『人事興信録』の学歴分析－」『関西大学社会学部紀要第12巻第2号』85頁～111頁
14）高根正昭，1976『日本の政治エリート－近代化の数量分析－』中央公論社
15）河野仁，1989「大正・昭和期における陸海軍将校の出身階層と地位達成－父親の職業階層の検討と昇進の規定要因分析－」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録第7号』53頁～65頁，河野仁，1990「大正・昭和期軍事エリートの形成過程－陸海軍将校の軍キャリア選択と軍学校適応に関する実証分析－」筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学－心性と構造－』木鐸社，95頁～140頁，河野仁，1989「近代日本における軍事エリートの選抜－軍隊社会の『学歴主義』－」『教育社会学研究第45集』161頁～180頁
16）廣田照幸，1987「近代日本における陸軍将校のリクルート－階層的特徴をめぐって－」『教育社会学研究第42集』150頁～166頁
17）日本近代史料研究会編・秦郁彦著，1974『日本陸海軍の制度・組織・人事』東京大学出版会
18）黒岡千佳子，1981「わが国における現代女性エリートの意識と実態」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録第2号』27頁～61頁，黒岡千佳子，1981「女性高等教育の発展と女性エリート形成」『教育学研究第48巻第1号』43頁～53頁
19）竹内洋，1983「学歴移動の構造－ビジネスエリートの家族にみる－」関西大学経済・政治研究所『価値変容の社会学的研究』72頁～99頁

20）波平勇夫，1974「機能エリートの地位特質ーパーソニアンモデルによる歴代閣僚および財閥エリートの比較分析ー」『教育社会学研究第29集』121頁～134頁，波平勇夫，1977「経営組織の官僚制化とその経営者補充に及ぼす影響ー三大企業集団における経営者補充源の比較分析ー」『社会学評論第107号』50頁～69頁
21）山本慶裕・高瀬武典，1987「ビジネス・エリートの地位達成過程ー大企業経営者の出身と経歴に関する調査よりー」『日本労働協会雑誌 No.337』21頁～32頁
22）山本慶裕，1982「中小企業経営者の学歴と補充類型」『大阪大学人間科学部紀要第8巻』61頁～82頁
23）黒岡千佳子，1982「わが国における大企業ビジネス・エリートと中企業ビジネス・エリート」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録第3号』67頁～103頁
24）葉柳和則，（近刊）「近代化日本と社会運動リーダーの形成」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録第9号』
25）戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著，1981『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会
26）廣田照幸・佐藤広志，1991「出郷者と地元定着者の学歴取得と地位形成に関する研究ー鳥取県名士録の分析ー」『アカデミア人文・社会科学編第54号』23頁～70頁
27）北川隆吉・貝沼洵，1985『日本のエリート』大月書店
28）橋本鉱市，1990「近代日本におけるエリート養成の教育過程ー旧制高等学校の教養主義教育についてー」『東京大学教育学部紀要第30巻』95頁～103頁
29）深谷昌志，1975「エリートの形成と入試制度」『教育学研究第42巻第4号』9頁～18頁
30）麻生誠，1983，前掲論文，546頁
31）中道実，1973，前掲論文，86頁
32）ロベール・エスカルピ（大塚幸男訳），1959『文学の社会学』白水社
33）リュシアン・ゴルドマン（川俣晃自訳），1969『小説社会学』合同出版
34）ヤン・ベルク（山本尤・三島憲一・保坂一夫・鈴木直訳），1989『ドイツ文学の社会史ー1918年から現代までー（上・下）』法政大学出版局
35）佐々木克衛，1975「近世の文学」高木博・佐々木克衛・神谷吉行編『新日本文学史要説・古典』双文社出版，137頁～173頁
36）佐々木克衛，1975，前掲論文，139頁～140頁
37）関良一，1971「近代作家の誕生」関良一『日本近代文学研究叢刊　逍遥・鷗外ー考証と試論ー』，有精堂，16頁
38）関良一，1971，前掲論文，25頁
39）関良一，1951「近代日本文学史の構想ー伝統と近代ー」『日本文学教室第7号』24頁
40）山内乾史，1990「近代日本における文芸エリートの社会学的考察」『教育社会学研究第47集』125頁～141頁

The Elites of Literary Arts and Their Educational Attainment in Modern Japan

Kenshi YAMANOUCHI*

This paper focuses on the elites of literary arts and their educational attainment. The elites of literary arts had given strong impacts on mass culture and public opinions with their works. Therefore, examining their social origins is an important theme to understand what kind of tendency Japanese modern literary arts had. In this paper, I will stress in particular on their educational attainment.

Three main results may be summarized as follows:

(1) First, I examined what is known about the elites of literary arts in modern Japan. I conducted a review of sociology of elites and sociology of literature. Consequently, few studies focused on the social construction of the elites of literary arts. In some of these, they are treated as one category of elites. Such studies suggest that were not fostered by a particular cultural context or a particular form of education.

(2) Second, I examined what is known about the elites of literary arts in medieval Japan. It was revealed that social class determined the type of readership, that is, the 'Sizoku' or the 'Chonin'. The peasant class composed little readership. Thus we can conclude that in medieval Japan the readership of literary works were devided by social classes.

(3) Third, I examined where the elites of literary arts came from. Many were born in large city such as Tokyo, and to families in the upper stratum, such as the professonal occupational stratum. With respect to education, many had received higher education, especially in selective institutions in Tokyo such as Tokyo Imperial University, Kyoto Imperial University, Waseda University, Keio University. However, many of them had failed to graduate. They majored in humanities, especially literature or philosophy. Elites from Imperial Universities were likely to have graduated from prestigious high schools in the large city such as 'Ichi-Ko' or 'San-ko'. Considering these results, we can conclude that the elites of literary arts were based on degrees.

*Research Associate, R. I. H. E., Hiroshima University